
LIMIT

M I I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LIMIT

【Nコード】

N7005F

【作者名】

MI I

【あらすじ】

日常生活を生きるある女子高生がいた。人付き合いが苦手で、それでいて人の心が良くわかる少女だった。そんな少女が、あるゲームセンターに入って、あるゲームに参加する。そして、力を手に入れる。

一章

別に、友達と一緒にいるのが楽しいわけでもない。かと言って、つまり

ないわけでもない。

それこそ、私の心に生まれたこの矛盾が、何かを意味するというのも、考

えがつかない。つまりは、別にどうでもいいのだ。そうだ、それでいいの

だ。

うん。

何をするでもない、ただ話しているだけ。会話が盛り上がるときも

あれば、

何も話さない静かなときもある。山あり谷ありの、山脈のような感じ。

とは言っても、静かになるときは少ない。ずっとわいわい話している。

もちろん、私はついていけない。

ただ聞き流すだけ……それが精一杯だ……

そんなことを思いつつ、私は友人と一緒に、ちっぽけな商店街を歩いて

いる。私を含めても、人数は五人である。友達いわく、これでも少ない方らしい。

私は、水鶏くいな 岬ゆり。どこにでもありふれた、至って普通の、平凡な、
高校

生だ。本当に、変わった所などない。まあ、よく変な癖があるといわれるが……

髪は所謂いわゆるショートヘア。身長は155センチと、まあ普通。目はパツチリと

は開いていないが、半開きまではいかない。ま、その中間……かな。私の説明は、そんなところでいいと思う。というか、もう説明する所が見つからないのだ。

第一、洋服を買うときぐらい、一人で選べばいいのだ。もう高校生にもなって……、でも、そんな反論を言えずに、ついて来てしまっている私も私なのだけれども……
本当に、どうしてこんな面倒くさいものに、ついて来てしまったのだろうか？

…愚痴を言うのも退屈なもんだな。

今日の予定は、特に決まっていなかった。学校帰りに、買い物に付き合ってくれないか？の一言を、すんなりと受け入れたのも、そのためだ。

用は暇つぶし。

「んゝ…もう買うものも買ったし、そろそろ帰ろうか？」

友人の一人が言った。よかった、やっと開放されるようだ。

「そうね、そうしよ」

「さんせい」

はあ、やっと家に帰れるよ…

私達は、学校の寮が、それぞれの家みたいなものだ。皆、身寄りに何かと問題ありだからだ。理由は深追いしない何かと面倒な面もあるから…。

私の場合、父の酒癖がとても悪く、毎度毎度、母が殴られていた。少なくとも、お酒が入って殴られなかった日は無い。

六年前、小さいながらも、私は父を恨んでいた。母は、何も悪くなかった、完全に被害者だ。

私も、何回か殴られた。

その度に、庇ってくれた母が殴られた。泣こうにも、そんな状況下の中、涙なんて流してしまったら父親が逆上するだけだ。

そんな毎日が、ある日終わった。

「もういい加減にしてよ！」

母のその一言が原因だ。被害者の言葉としては、至って普通の言葉にしか聞こえない。

事実、問題点はこの言葉自体ではない。言葉に過剰に反応した父が、一升瓶で母を力任せに殴った。一度ではない、数十回だ。

もちろん、それで助かるものなどいない。母は、そのせいで、命を落とした。父に殺されてしまった……

そんな父から逃げるように、私は家を出た。というより、中学から寮のある学校に、入学したのだ。

もちろん、入学金・学費・生活費は私一人では払えない。

だから、死に物狂いで勉強をして、奨学金を受け取るほどにまで……あんな父親の助けなんて借りたくないと思った。

まあ、そんなところだ。

寮暮らしは悪くない。学校の方は私服で、特に指定はされていないとい

つても、限りなく自由というわけでもない。多分、田舎だから……ねえ。

もちろん、常識の範囲内で許される服装しか、許可はされていない。わたしは、至って普通の格好をしている……まあ、他の生徒が奇妙な格好で

登校するため、私の格好が不自然に見えるわけなのだが……

「ねね、この先にあるゲームセンターで、プリクラ撮ってかない？」

……なんだって？この期に及んで、まだどこに行くというのか？しかも

プリクラ？なんだってまた……女の子は本当にそういうのが好きだなあ……

ま、私も一応女の子なわけだが……そういうのは、あまり好かない。とにかく、早く帰りたい。適当に付き合っ、さっさと帰ろう。うん

このゲームセンターには、一度だけ来たことがある。もちろん暇つぶし

であるが…

そういうと、趣味は？とか、将来何がしたいの？とか、よく聞かれるが…

これといって思い当たるものが無い。もちろん、特技もだ。

夢がないといわれても、反論はしない。それが現実だ。夢なんて見るだけ

でいい、持つと厄介だ。

さて、ゲームセンターに着いた。“デモクラシー”とか言う名前
で、聞

いただけで人気の無いイメージがある。しかし、設備は至って最新。
屋内

も掃除が行き届いている。きれいなものだ。

十分後

何とか撮り終わった。

でも、最後まで笑えなかった…。

母が死んでからは、笑ったことが無いと思う。

何度か友達に促されたが、やはり無理である。

写真に写った私は、どれも仏頂面だ…仕方ない。

撮り終わったのは良いが、今度はそれに絵を描くのだという…どこ
まで

こだわるのか…まったく…

「…ちよつと、その辺見てくる」

「あれ？坪は描かなくて良いの？写真イッパイあるヨ」

だから、描きたくないから、暇をつぶそうと思っていたのに……

「…うん。いいよ、僕は皆のを少しずつもらって、それを楽しむから」

これが、変な癖。自分の事を『僕』といってしまふ。中学からずっとこう。

…別に気にしたことは無い。

「そう？ならいいけど」

なんとか、かわせたみたい……

見るものといっても、UFOキャッチャーの景品をただひたすら眺める

だけのこと……つまらない……

男の子が好きそうな、格闘ゲームやらなんやらがあるエリアに来た。もちろん、遊ぶ気は無い。というより、目の前にいる集団に絡まれなくな

いだけなのだが……

眼鏡にリュックサック、頭にはバンダナをして、手にはなにやら紙を持つ

ている。私から言わせれば、仕事をしない金持ちだ。彼らは特にそれがまさに目の前にいる。こんな間近で見たのは初めてだ…ヲタクを…

三人も……

と、そこですぐにいなくなればよかったのに、眺めていたせいで一人

と目が合ってしまった。彼は目を輝かせていた。もちろん、私は引く…

面倒なことになる前にさっさと帰ろう、よし。

「…あ、ああ」

何かを言おうとしているようだ、私が踵を返したその瞬間

「き、きき、君！ちよつといいかな？」

ああ、呼ばれてしまった。しかたない、話してやるか…暇だし。彼女らは

後三十分は動かないだろうし…。

「…僕ですか？」

あえて疑問形で返した。と、言った後、後悔した。こんな変な癖に。

「そ、そう君！ちよ、ちよつとこっちに来てくれ」

ため息が出そうになった。三人とも、目がキラキラしている。いやな予感が……

「き、君！ゲームは得意？こ、このゲームやったことあるかな？」

挙動不審なその人に対し、冷やかな目線を送りつつ、示されたゲーム機を

見る。

五つの縦長のブースを持った、柱形の機械だ。そこから、モニターの付い

たやや小さめの機械へと、何本ものコードが繋がっている。全体的に真っ

黒だ。唯一、ブースの入り口だけは、アクリルでできているため、

濃い茶

色をしている。

「…ゲームは…苦手じゃないですけど……これは、やったことが無いの

で……すいません、僕には無理です」

顔色は变えず、表情も变えず、静かに言った。

「そ、そうか…いや、いいんだ。すまない」

「いえ、別に。暇でしたし…それでは」

軽くお辞儀をして、私は再度その場を去ろうとした。しかし
「き、君！い、今、暇って言ったかい？」

きよとんとした顔で、私は振り返る。

「…はい？」

まあ、まさかとは思うが……

「い、いや。暇なら、このゲームに付き合ってくれないか？」

…予想通り、か。ま、なにもすることないしなあ、

「…いいですよ。僕でよかったら。ところで、なぜ僕を？」

まあ、私なりに、機転の利いた質問だったと思う。

「そ、その…このゲーム…まあやってみてくれ。単に他の人とも戦
って

みたいだけなんだ…」

後ろの二人とシンクロしたように、同時に困ったような、満面の笑
みを

返してきた。

ふーん、おもしろそう。ま、適当に終わらせてもらおう。どうせ、
私

がやることは無いし。操作とか、苦手だし…

「…どうすれば？」

「お、おお！やる気になってくれたかい！そ、それじゃあ、まず登
録か

らしてくれ！こ、この機械で」

うれしそうだなあ。そこまでして、戦いたいのか。でも、このゲー
ムの

趣旨がわかんないなあ。

見た目格闘ゲームには見えない。操作盤はおろか、画面すらない。

先ほどの、モニターのついた機械の前に連れて行かれる。構造として

は、説明がないと何も出来そうにないほど、複雑だ。

「じゃあ、お金は俺が払う」

それはありがたい。私は、今日、あまり持ち合わせがなかったから。

「後は、手順どおりだから。頼んだよ」

モニターに光がとる。ゲームの名前は…《スターゲイザー白日夢》か。いや、意味は分らない。

なにに、本名と住所、このゲーム中で使う名前、とそれから…それだ

けか。住所って………なんで？まあいいか。

水鷄岬　住所は…学園の住所でいいか　ハンドルネームは…

適当。

ラ行だと神秘的かな？（意味不明）

“ロロ”でいいや。

「ええと、次は……ん？手のひらを置け？ああ、ここか」

縦横の線の入った小さなモニターに手を置くと、緑色の光が読み取った。

《ピピピッ》

「…よし、読み取り完了、か。次は、全身を構成…ね」
意外と面倒くさい…

白い光と緑のラインが、頭のとっぺんから足の先まで、しっかりと読み取

った。いや、読み取られた。

…正直、目は瞑っていたので、実際何が起こったのかは分からない。
《ピッピピピ》

「ん？」

大きなモニターに、文字が写された。

『あなたに効果的な武器を選出します』

ふうん…武器ね……。なにかな？

『剣』

「……ん、剣？僕が？しかもこれだけ…」

モニターに絵が写される。黒と白の二つの剣、双剣である。

見た目はたしかに剣なのだが、剣先から横に飛び出た突起がある。

一方はの突起は四角く、内部が不思議な模様にくりぬかれている。
もう一方は、等間隔の半同心円状に、短い突起が付いている。

いずれも、柄の部分からグリップの端にかけて、持ったとき鈍れな
いため

の細工がされていた。

「……なるほどね。まあ、いいか」

最終チェックを終えて、決定キーを押す。特に何の音もせず、右の
小窓か

ら、カードが飛び出てきた。どうやらこれが、参加登録らしい。

「終わりましたよ。これでいいんですね？」

振り返りざまにカードを見せる。

まあ、見たところで私には分からないし……

「あ、ああ。ありが……。ん？これは……」

はあ、何か疑問点があったようだ。

「これは、ミスプリだねえ」

なんと！ここまで来てミスと！ああもう、これだから機械は！

「ほらこれ。俺のカードにはしっかりと数値が書かれてるだろう？
これ」

確かに、指された所には、1004/110039と書かれていた。
「君のには、数値どころか、使う道具すら書いてない。やり直した方がい
いよ。うん」

確かに、“ロロ”という名前以外は、他に一切かかれていない。全部破線
である。さっきの武器選択は、何の意味もなかったということか…

「…ん？」

と、あることに気づいた。カードの左上に、唯一の数字が書かれていた。

それは、ローマ数字なのだが…

「あの、もう一度見せてもらえますか？」

私は、カードを受け取る…やっぱりだ。

「どうかしたのかい？」

「いえ、何でも。ありがとございます。これで動かなかつたら、
もう一

度登録しなおしますから」

丁寧にお礼を言って、カードを返した。私はもちろんこのカードで
参加。

作り直すのが面倒だ。

「そ、それじゃあ始めようか…うん」

顔がにやけてる…もう勝った気にいる…まあ外れてはいないが…ブースに入ろうとした、その瞬間。

「あ！いたいた。岬いー」

友達だ。どうやら探していたらしい。

「どうしたの？」

まあ、普通の質問であろう。

「ん？いや、私達はもう終わったからさ。後は問題の二人だけ」

そうか、あの二人か…友達のうち、二人は妙に凝ってしまうのがある、

ベタなパターンだ…だから、来たくはなかったのだが。

「で、岬はなにしてんの？」

「ん？ああ、お手伝いかな」

…多分違う。言ってから思っても、遅いのだが…

「あれ、友達？」

やっと気づいた。目の前のゲーム機に集中して、こっちは目もくれてい

なかったから。

「はい…え？」

目、目が輝いてる…もしかして…このパターンは…

「き、君たちも、参加しないかい？」

…予想通り…か

「ええ！良いんですか？！やったー、面白そう！」

…そこまでテンションが騰がるものなのか…まだ内容も聞いてな

いのに。

というよりも、この二人は不審者にだまされるタイプのようだ。こ
こは引

き止めるべきか？友達として……

…ま、今の私が言っても…説得力ないか…

「も、もちろんだよ！ささ、早く登録を！」

あーあ、行っちゃったよ。物好きだなあ、皆お金がかからないから…

「じ、じゃあ、あの二人が登録終わるまで、これを読んでくれ。
一応

簡単なマニュアルだから」

今更かい！先に渡せよ！

「…分かりました」

とりあえず、マニュアル読もう。薄いし……厚いと読む気になら
ない。

えーっと、なにになに……このゲームは、あなたの遺伝子情報を元に
造られ

た、もう一人のあなたが、中枢サーバー内の架空世界内で、他の参
加者と

対戦するゲームです。参加方法は、ブース内のヘルメットをかぶっ
て頂け

ば、コンピューター処理により意識情報、感覚情報、思考、感情な
ど、脳

そのものの機能をコンピューター内に移します。

か、なるほど……意外にハイテクだな…

後日、お送りいたします簡易参加ゴーグルを使えば、店内で繋いで

参加

はもちろん、電波の届く範囲なら、どこでも参加できます（料金は、月ごと回収されます）

ええと、次のページね。

架空世界のあなたは、あなたが選んだ道具で戦います。約千種類の道具からあなたに合ったものを、十数個まで減らして表示いたしますので、そこから選んでいただきます。

…ちよつと待って、十数個？私一個しかなかったけど…まあ、まだカードが読み取られるかどうか分からないしね……ミスプリ…

試合は、体力制。ですが、参加者の精神状態が危険だと判断された場合は参加者の敗北が決まります。

そんなところか、裏にも写真しか載ってないし…

「終わりましたよ！」

意外と早かったな。もうちよつとかかかると思ったけど…

「それじゃあ、始めよう。六人いるから、俺はこれを使う…ああ、もうち

よつとしたら、君らのところにも届くから」

黒光りする、いたって怪しいゴーグル…というよりヘルメットを持

っている。
なるほど、これがさっきのゴーグルか…これを届けるために住所が必要だったのか…納得。

今度こそ、ブースの中に入る。少し狭いのが気になるが…まあ、椅子のせいであろう。
椅子に座って、右の読み取り口にカードを入れる。ブースの入り口が閉まり、個室になった。後頭部にある機械が、一度上にあがると、頭的位置まで下がってきた。まだ何も見えない。と、そう思った瞬間だった。

全視界が開ける。いつの間にか、ビルの立ち並ぶ街に立っていた。
もう、ゲームが始まったのだ。

ちよ、ちよっと待って。なに？操作じゃなくて、本当に自分が行動するの？！
…まあ、脳そのものが読み取られるって書いてあったし……
とりあえず、今、自分が置かれてる状況を確認しないと。

私は今、ええと、服が、変わってる……真っ黒いコートで、同じ色のフードをかぶっている。でも、なぜだろう…見てもいないのに後ろにあるものが、
全部分かる……これは、このゲームのせいなの？

…手には何も持っていない……剣は？

この場所は…どれくらい広いのか……見当もつかないや。

「…とりあえず、移動かな」

右足を一步前に出した、すると。

「そこにいるのは誰！」

いきなり敵に出くわした。そんな早く会うものなのだろうか？

…まあ、確認するまでもなかったが、私の友達である。振り向いて、確認し

たら…やっぱりそうだ

「僕だよ。水鷄岬」

フードのせいで、相手には顔が見えないためか、まだ警戒されているらしい。

「…フードを取って」

…はあ

「声でわから——」

「いいから取りなさい！撃つわよ！」

手に持った小銃の銃口が、こちらを向いていた。つくづく面倒くさい

私はフードをとる。黒い服のせいで、顔だけがやけに目立っているのは、

言うまでもないだろう。

友人は、顔を確認すると、小さく安堵した。

「…よかったあ、誰にも会わずに終わったら、どうしようかと思ったよ」

それは、私も同じである。

彼女はどうかやら小銃を選んだらしい。黒と銀の銃…ありがちなパターンだ。

「ところで、岬はどんな武器なの？」

「それが…何も持ってなかったの」

真実である

「…へえ、そんなことってあるんだア」

「いやいや、あなたはこれやったの初めてでしょうが！

五分ぐらい何も行動せず、ただこのゲームについて話していた。

「第一なんなのよ！これは！」

…急にキレられてもなあ、対処のしようがないよ。

「ま、私にかかれば、こんなゲームで勝つのなんて容易いけどね」
始めたばかりでこの自身は…一体どこから……

「どっからでもかかってこーい！」

かくしん

と、寒気がした。私は慌ててその場から離れる

「ちょ、ちよっとー。何処行くの？」

「は、早くそこから逃げ——」
遅かった。

「きゃー——」

短い悲鳴とともに、彼女は消えた。数字の羅列に包まれて、友人が消え

ていく。そして、完全に消えた。

「…な、なにが」

「なにが起こった？って顔をしているね」

「！？」

背後から声がした。身を翻す。そこにいたのは、先ほどの、気の弱そう

な人だった。

「彼女らはね、僕らの作戦に見事に引つかかったよ。見たところラン

クだったね。まだまだ甘いな」

今度は別の声が、頭上から。最初の場所へと急いで戻り、フードをかぶる。

「君らは、戦いなれていないから」

…囲まれた。数秒で、私は身動きが取れなくなった。

「やはり、俺達の作戦は正しかった」

「みたいだな。さて、それじゃあ最後は」

「男同士の戦い（・・・・・・）といきますか」

くそっ、三対一は圧倒的に不利だ。

相手はチームを組んでいるから、私がやられれば……それでクリアだ。

「……って僕は男じゃない！確かに、僕って言うけど……」

違う！こんな変な所に突っ込みを入れている場合じゃない……けど、どうしてこんなに熱くなれるんだろう？

楽しいのか……

「……そうだったのか、まあいい」

くそー。手も足も出ないよ……。

とりあえず、相手の情報を今のうちに見ておこう。

一人は太刀、長さは約二メートルか。

次の人は……何も持ってない？いや、手に小さい何かを持っている……多分あれは、爆弾。超小型の手榴弾みたいなものか……

三人目、小刀を何本も……飛び道具か。

相手はわかった。でも、どうする？こっちには武器も何もない……

「怖がるなお嬢ちゃん、すぐに終わる」

太刀の男が、猛スピードで突進してきた。

「……うう、どうすればいいんだあー」

叫んでも何も始まらない、悔しいな……何もしないで、負けちゃった

よ。

斬られるのを待つように、私は目を瞑る。

『……まだ眠ってんの？』

……あれ？

「声が、聞こえた？」

確かに声がした……でも……

『……いい加減に起きてくださいよ……我が主人』

その言葉で、何かに目覚めた気がした。

刹那

私は、閉じた目を思いっきり開く。

手を横に突き出し、頭の中に流れてきた情報を、聴いたことのない言葉を、

まるで知っているかのように、口に出す。

「空より降りし白き輝きよ、地より生まれし黒き影よ、（E l a r o b u g i n q e s t a s i d e u ）対となり虚栄（J y a p s k a h i ）となり（f t y a）、我が許へ集いたまえ。（K i o l a e r a n f i a z a m ）契り従誠を、ここに結びたまえ（Q o i g v y a j k a p o u ）」

その言葉を言い終えるとともに、光が私を包んだ。

両手には、先ほどのシルエット、白と黒の二本の剣を持っていた。

ここまでの時間、わずかに四秒

「らあ！」

太刀の一撃を、かんだ状態で、右手の白い剣で受け止めた。

「天空の右（MEATOR）・白剣（poro）^{ロスト}・損墜の振り子^{ペンデュラム}」

声が、勝手に生まれる。なんだろう、動ける。

受け止めた状態から、おもいつき相手を弾く。

相手は私の正面のビルへと飛んでいく。

彼の激突と同時に、ビルが崩れた。

「な、なんだと！ランカーの籐矢を、投げ飛ばしやがった…」

明らかに、相手は動揺していた。

無理もない

私は今、彼らよりも強いと確信できるほどの力を持っている。

「こ、このやろー！」

二人目は、小刀の男だ。一気に十本の刀を投げてきた。

「…」

何も言わずに、左手の剣を回す。

すべての小刀が音を立てて地面に落ちた。

「帝地の左（FORBIDDEN）・黒剣（TRET）^{ロコリア}・饒舌な経^{スクリ}
典^{フチャ}」

両手の剣先を地面に向ける。

「双対剣（TUINS WORDS）・口口トラクター」

「くっそー、ビギナーズラックに油断するな！三人で一斉に攻めるんだ！」

往生際が悪いな。もう、終わらせよう。

三人が、私のところまで走ってきた。

攻撃が当たるその紙一重を避け、私は彼らの前から姿を消す。人間離れた脚力で後方宙返りをして、暫し空中に留まる

「き、消えたぞ！どこ行った？」

「わかんねえ、どこにもいない！」

…あなたたちのおかげで、いい暇つぶしになった。ありがとう。
『なっ！』

三人の声が重なる。私は、一瞬のうちに彼らの中心に戻ってきた。彼らが私を見つけて、瞬きをするよりも早く、私は剣を振った。私を中心に、同心円状に衝撃と斬撃が広がる。

見事に、相手を巻き込む。

そこで、ゲームは終了した。

「う、うう。まさか、君が上位ランカーだったとは…負けた」

…どうやら勝ってしまったらしい。彼らの話では、三人とも、何度か大会にも出ていた凄腕らしい…：知らなかった。

「…いい暇つぶしになりました。ありがとうございました」

それだけ言って、私は怯える友達を引き連れ、戻っていた。どうやら、

二人とも怖かったみたいだな、あのゲームが…：トラウマが一つ増えた。

でも、私はとてつもない力を手に入れた。このゲームで…

そもそも、ランクという存在を私は知らない。何せ、私のカードには何

もないからだ。唯一、ローマ数字で書かれた0/X（虚無）という

文字と、武器の

欄に書かれた、ロロトラクターという名前以外は…。

「…だから、このカードを使ってみたかった」

小さく呟いてみたが、誰も聞いていなかったと思う。

c o n f u s e

「ただいまー」

おお、やつとの思いで帰ってきた！我が家よ！

と、誰もいない家にさびしく声を掛けるわけであり、寮なわけだが

……

それでも家であることには変わりない。

オブホワイトとグレーで統一された、家具の少ないこの部屋は、約六畳の

部屋が一つと、小さなキッチン、洗面所ぐらいしかない。

可愛い人形もない、女の子らしい服もない、なんなんだこの部屋は？

とよく言われるのだが……それが重要か、いまいちよくわからない。

ベッドに倒れこみ、天井を仰ぐ

手に持ったカードを掲げ、文字を眺める。

「……ロロ……」

先刻、初めてにもかかわらず、大会出場者三人を一撃で倒した。

それはもちろん自分なのであるが……そんな感覚になれない。

別の自分が、それこそ自分ではない別の人が……私の代わりに戦った……そんな感覚。

「……お目覚め下さい……我が主人……」

そして、この言葉。不意に聞こえた……その直後、“ロロ”に関する全ての情報が頭に流れ込んできた。

いや、実際は全てではないのかもしれない。しかし、少なくともあの状況をどう回避するかは、一瞬で思いついた。

理由は良く分からないが（ミスピリの影響であるとは思うが……）

私のもつこのカードは、力を秘めているのかもしれない…と、いろいろと考える可能性を展開させてみたが…

「さすがに、SF小説の影響がありすぎるか……」
そう考えるのが一般的だ。というより常であろう。

特技も何もない、ましてや剣なんてはじめて持った私が、大会出場レベル

ルの三人を、初めてのゲームで、一撃で倒すことなんて不可能だ。

「……………ばかばかしい」

カードを机の引き出しの奥にしまう。どうせ私はこのカードに一銭も使っていない。惜しくはない。

と、ドア横にある簡易メモポスト（本当は別の言い方があったけど、

こう呼んでからは忘れた……）に、何か入っていた。

「……………」

まあ、見ないわけにはいかないかな……と思って、ポストの中身を見る。

入っていたのは、届け物の案内。何か届け物があると、一旦下の事務室に預けられて、そこから部屋に電話が入る。不在のときは、メモが入るのだ。まあ私の場合、普段から届け物などないのだが…

「……またなんか……いやな予感がする」
というのも無理はない。

一度、男子の悪戯で、爬虫類の入った小包が届いたことがあった。普段は暗く見られる私だが…実際、普通の女の子とは大差ない。

大絶叫だった。

普段から話すことすらしない私だ、誰も私の声だとは気づかないだろう……仕掛けた本人達以外は……

「取りに行かないわけには、行かないんだよね……」
仕方ない、行くか。

半信半疑で行けば、何が入っただけ……た、多分大丈夫……
私はエレベーターに乗り込み、一階の事務室に向かった。
入り口付近にある事務室までの道のりが、なんとなく不気味に感じた。

真っ白、若干灰色がかった不規則な線が、その部屋を覆う。
ここは、データで作られた世界の、ほんの一部の小さな部屋。
そこにいる人間は、全部で十一人だ。

中央にスーツ姿の男性。そして、彼を中心に、十人が円形に並んでいた。
等間隔の光の柱に、それぞれの人間が立つ。

中央の人間を除いて、残りの人間は黒いコートを纏っている。皆、頭に

フードを被っているため、その表情は読み取れない。

規則的な機械音と、時々聞こえる雑音。それ以外の音は無い。

不意に、中央の人間が口を開いた。

「さて、集まったみたいだね。始めよう。まず、ここに呼んだ理由から

だが……実は、十一人目が見つかった」

よく通る声だった。

周囲に居る者は、その視線を中央の男に向ける。

「…半端だな…それに急だ」

黒いコートの人間の内の一人が、声を発した。低く、それでいて風格のあ

る声だった。体格は比較的大きめで、身長は一番高いであろう。

「…まあ、無理も無い。今さっき反応が生まれたからな……急いで手配さ

せた。戦力は一人でも多い方がいいからな」

腕組をし、鋭い目線を送る。

「しかし…」

先ほどのコートの男が言った。

「この人数にもう一人加えるとなると、集合場所を変えないとならないな」

皮肉のように言う。

「ならば、お前が行って始末してくればいい」

別の男が言う。比較的高めの声を持ち、その体格もスポーツタイプで、

凜とした雰囲気醸し出していた。

「可能だよな、マスター」

どうやら、中央の人間はマスターといわれているらしい。

「ああ、もちろんだ。すでに“エントラ”も送ってある。ただ、もう一度

参加すればの話しだがな…」

小さな静寂が、その場を支配する。

「男か、女か?…」

低い声の男が言う。

「いいじゃない、性別なんて。私達には、そんな関係ないはずよ。それとも、女性には手が出せないの？」

言ったのは、女性だった。それも、二十代の半ばほどであろう。どうやらここには、年齢・性別は関係ないようだった。

「図に乗るな」³（スリー）、女であっても容赦はしない」

「ならいいけど…」

低い声の男は、マスターに向かって言う。

「俺に始末させる。いまさら来る奴なんてそんなに当てにならない」

「…いいでしょう。まずは相手をしてみてください。『5』（ファイブ）の名はダテ

ではないことを見せてもらいましょうか」

マスターが言った。それぞれの人間は、ローマ数字で呼ばれるらしい。

「…それで、そいつの番号は？」

「…推定ではそのまま、『11』（イレブン）と推定されている」

「…そうか」

「では次回、またこちらから知らせます。解散」

その言葉と同時に、部屋が暗くなる。マスターのいる位置以外は、光が消えた。

「おお、岬ちゃんか、小包来てるよ」

事務室のおじさんだ。彼とはとても仲がいい。

実は、この学校に入学してから始めて話したのが、このおじさんだ。私から話したわけではないが……まあ、今現在仲がいいのだから、その点は問題ないだろう。

「ありがとうございます」

とりあえず受け取っておこう。きっと送り主はいないんだし……

「はい、これだな。ええと、送り主は……」

なんと！想定外の出来事が起こった！送り主がいるのだ！

「…え、あ、あの。誰ですか？誰から来たんですか？！」

小さな動揺を隠せず、早口になってしまった。

「ああ、ええと……うお……わー……ん、読めんな」

…まあ、後で自分で確認すればいいか。

「あ、じゃあもらっていきますね」

そういつて、少し緊張気味に小包をもらって、自分の部屋に帰ることに

した。

「World create technology……かな」

送り主の欄には、確かにそう書かれていた。“世界を作り上げる技術”

なんともまあ、怪しい……

まさかとは思うが、またあの男子達が手の込んだ悪戯を仕掛けてきたのではないかと、変に疑い深くなってしまう。

小包自体は小さく、それでいて軽い。

さて、エレベーターが私の部屋のある階に着く。
まだ夕暮れになったばかりの時間帯にも関わらず、その階は静か過ぎる。

部屋までの十数メートルが、いやに長く感じた。

部屋のドアを開けようとしたその瞬間、普段ならば…いや必ずと言って

もいいほどにあってはならないものが、私の目に飛び込んできた。

ちょうど右隣の部屋、先ほど私と一緒に意味深なゲームに参加して、奇

妙な思い出と共に、トラウマを植えつけられた友人のいる部屋だ。そこにあつたものは、普段の私ならば絶対に気にしないものであつた。

他人の部屋など興味がないのだが…今の私には、それを指摘せずにはいられなかった。

>ピンポン<

明るいインターホンが鳴った。

数秒の沈黙の後に、はいという聞きなれた声が返ってくる。

ドタバタという音がして、慌てたようにしてその友人は出てきた。

開いたドアの隙間は狭く、中が見えるか見えないか…そんな具合だった。

「はいはい…ありや、ゆりちーじゃん…なんだ、びっくりした

…」

…そうそう、この子は私のことをそう呼ぶんだ…ちょっと恥ずかし

い呼び名だ。でも、このあだ名を替えるよう頼む勇気が、私にはない。

「ど、どしたの？」

多分、彼女なりに驚いているんだと思う。

私をまじまじと見て、瞬きさえもストップしていた。

私が他人の部屋を訪ねるなんて、きつと…絶対…絶対に初めてだから。

「……………」

私は無言で、ドアの前に会つたものを指差す。

男子の靴だ。

ここは女子寮。言わずもがな、男子禁制。私も一人の女の子として、男

子が入ることには抵抗があるのだ。嘘ではない。

「……あ」

口を大きく開け、その場で顔面蒼白状態。

「これ、片付けといた方がいいと思うけど……何やってんの？」

私は小さな隙間から部屋の中を覗こうと、首を伸ばしてみたが……

「な、なな、何もやってないし！誰も居ないし！」

彼女の方から墓穴を掘った。

「それは居るって言ってるようなもんだよ……男子は入れちゃダメ」

まあ、この忠告で聞く子ではない。直接部屋の中に入るしかないのだ。

「……さっきの……」

つと、想定外……しっかりと返答があったぞ。

「……へ？」

さっきの……では何がなんだか分からない。この子の言うさっきはいつだ？
買い物中？ゲーム中？後？とりあえず話を聞くより他なかった。

スターゲイザー

「……“白日夢”……悔しくて……それで……」

一瞬、その言葉が意味するものが、よく分からなかった。
しかし、それはすぐに確信へと変わる。

例のゲームだ。

「……始まって……三分ぐらいで終わっちゃって……悔しかったから、
知り合いの男子に電話して、特訓してもらおうと思ってたの……」
……楽しかったのか？そんなにあのゲームが楽しかったのか？

私はもうやらないぞ。カードはさっきしまった、と言うより封印した。

「…ねえ、ゆりちーは勝ったんでしょ！あの人たちに勝ったんでしょ！なら、一緒にやって！この…男子が入っちゃったことを知っちゃったから……」

目面しいことはするものじゃない。

今日、今この瞬間に、私が新しく生み出した教訓だ。

それより、子の序が言った言葉の後半は脅迫交じりのような気がするのは、気のせいだろうか…？

「お願い！」

私はこの言葉には弱い…頼まれると断れないタイプだ。

「…仕方ない…一回だけだよ。僕はもう興味ないから」

「ホント！？ありがと〜」

…これで本当に最後にしよう。

「じゃあ、部屋行ってカード取ってくるから、待ってて。靴はちゃんと隠しといた方がいいよ」

それだけ言って、部屋に戻った。

カードを出す。

一度はミスプリと思ったカードも、ちゃんと使える。

そういえば、未だ小包を開けてなかった。何が入っているんだろう？手に持った小包を一旦机に置き、カードをその横に置いた。

がさがさと乱雑に紙袋を破き、中から出てきた真っ白な箱を開ける。

FIND

中身は、あのゴーグルだった。

「…へ、こんなに早く届くの？」

入っていたのは、ゲームセンターにいた、あの仕事をしない金持ちの一人が持っていた、ゲームに参加するためのゴーグルと、なにやら紙と、私が持っているのと同じようなカードだ。

ちようどいい、これでも持っていてやろう。

その考えは、あながち間違っていないはずだ。

今からゲームセンターに行くのだろうか？それは流石に無理がある。寮の門限が迫りつつある今、ここを出るのは勇気が必要だ。

「これは…何？」

小包に同梱されていたカードを見る。

見た目は自分のものとほとんど一緒なのだが、名前の欄に『ルディ』と書かれている以外、何もない。

なんらさっきのカードと変わらない。

「…説明書は説明書？どこどこ？」

もう一つの内容品の紙を見る。

スターゲイザー

「“白日夢”への参加。誠に有難う御座います。この度はそれに伴い、

家庭でもお楽しみ頂けるゴーグル、通称‘エントラ’を送らせていただきます。尚、参加は使用時間の料金制で行いますので、詳しくは

裏面

をご参照下さい。使用方法は、頭に装着して頂くだけで結構です。

但し、
開始時はエントランス兼用の架空の街がありますので、詳細設定は
そち
らの方でお願い致します。それでは、総合ランキング一位を目指し
てが
んばって下さい」

一ページ目はこれだけか……というか、これ二ページ分しか無い……
まあ、碌な事は書いていないだろうと思って、サラサラっと眺め
てみ
た……けど、直にしっかりと読み直す……自分の目を疑った。

さて、友人の部屋を訪れる。玄関には靴が全部で四セット。男子
は三

人いるようだ。でも、何で片方だけ外にあったんだろう？まあ、気
にす
るだけ無駄なんだけど……

「んお、目面しいな、水鶏じゃん。何やってんのお前？」

最初に話しかけてきたのは、クラス一よく喋る男子。でも、私は話
した

事は一度もない。

「……」

返事はあえてしなかった。というか、何やってんのって言うのはこ
っち

の台詞なんだけど……

「ゆりちーね、お手伝いに来たの。この子もさっき一緒にカード作
った

からさ……」

「ふーん。まあいいか。ついでだからお前も強くしてやるよ。まだ戦い慣れてないだろ」

当たり前だ！まだ一度しかゲームやってないんだし……ってこんな事言

つても聞くはずはないだろうけど。

「そっぴゃ、お前もさっき作っただよな？」

彼が別の男子に話しかける。

「……………」

返事はなかった。

「チーム戦でもするか？俺は一人でもいいから」

これはまた別の男子。確か……いつもは落ち着いた雰囲気の子生徒だった

はずだが……何か雰囲気が違う……所謂ゲーマー……かな？

「じゃあ、そうしようぜ」

最初の男子……もうそう呼ぶの面倒くさいから、彼は……えと……A君と呼

ぼう。

因みに、二人目はB君。さっきの無言の彼はC君と命名。これなら呼びやすい。

そういえば、彼女には「エントラ」が見当たらない。届かなかったの

だろうか？

「……ねえ、あの——」

「そう言えばお前「エントラ」持ってないんだろ。ほらこれ、弟のや

つあるから貸してやるよ」

「あ、うん。ありがと」

どうやら本当にないらしい。

何で私には届いたのだろう。

そう思ったもう一つの理由が、C君だ。

彼もさつき作ったばかりだとA君が言っていた。それなのに、私同様

‘エントラ’を持っている。

「よし、水鶏は今持つてるの見たから、オーケーな。そいじゃ、コトノ

ポリス三番街・ホルステンゲート前に集合！確認のための合言葉は、『どこまでもついて行きやす！兄貴！』ということぞ！」

『場所とはかく合言葉は却下』

A君の提案は、私を含め意気投合した四人が同時に切り捨てた。

というより、何を基準にして合言葉を考えたのだろう？

「じゃあ、何ならいいんだよ！」

少し不機嫌になったA君が言う。

「この女子二人だけ『到着いたしましたご主人様』は？」

今まさにこの瞬間、B君を殴りたかった。でも、それは代わりに彼女が

やってくれたから、満足。

「…もういいよ、それぞれの名前を言えばいいだろ」

C君が喋った！いや、驚くことではないんだろうけど…それでも…何か

違和感があるのは私だけだろか……

ああ分かった。私は彼女以外の名前を知らないからだ…

「じゃあ、それで！よし皆の衆、ホルステンゲート前でまた会おう。

お先に！」

A君がゲームに参加し、B君、C君が続く。

「私たちもいこっか」

「分かった」

彼女がゲームに入った。私は「エントラ」から聞こえる小さな機械音を

聞きながら、手に持ったカードを眺める。

「……通常、ゲームの参加はルディで行うこと。ルディのカードを上

にして、ロロのカードと重ねて「エントラ」に入れる。

なお、今後の参加は全て、その「エントラ」からのみ行い、特別な指示

がない以外はルディで入るように……か」

これが、小さな紙の二ページ目に書かれていた内容だ。

しかも下のほうには小さな文字で

『これは特別な者のみに送られるものである。決して他人に話してはい

けない』

と書かれていた。

私はどうやら、何か特別なもの選ばれたようだ。

「よし、行こうかな」

そして、ゲームに参加した。

開始は、ゲームセンターの時と変わらなかった。

画面が暗くなり、次の瞬間には別の世界だ。

唯一違うところといえば、ここはビル街ではない。普通の町だった。

「まあ、部屋に居た訳だし……一応はゲームの中……かな」

今はどうやら、交差点のど真ん中に居る。理由は一切不明なのだが、なぜか交差点。しかも車も人も、何一つ無い。

周囲には高いビルが立ち並び、ちよくちよくと店の様なものも見て取れる。これが架空現実（別名：異相空間）というやつだろう。

一人で納得していた。

そういえば、着ている服も違う。さっき着ていたのと何ら変わらないのだ

…黒装束はいつたい……

私は、とりあえず移動することにした。

A君の言っていたホルステンゲートという場所への道筋がわからなくて、

集合場所にも行けない。

そう思っ、広い交差点を後にし、かろうじて見える駅まで行くことに

した。

実際、駅ではないのかも知れないけれど、私の知る限りあれは駅だ！と言

う様な感じだったので、行くことにした…曖昧だけでもね…

伝わり辛いと思うので、補足を……それは、高さ的にはビルの二階ほど。

大きく出っ張った建物からは、東西に線が伸びている。線は鉄橋の

ような

物で支えられており、どう見ても私には線路にしか見えないのだ！
あれは線路だ！そしてその横の建物は駅だ！

もうそれで決定！

…いつに無くハイテンションな私…：ちょっとおかしいかも…

難なく駅にたどり着いた…けど人一人見当たらない。

小さな孤独を感じ、私の歩く音の響きだけを聞きながら、何か役に立つも

のを探してみる。

「……」

駅に一人で来たのは、これが初めてかもしれない…ふと、心の中にこみ

上げてきた。

今まで、自分という存在を人から隔離し、否定し、自分が消えるか世界が

消えるかのどちらかを望んでいた。

「そんなこと…到底起こらないのに……」

小さく呟く。

わかつてはいるが、それを捨てきる事が出来ずにいるのだ。

心が、いつも苦しい…

開放されたいと…常に願う……

でも………

一体何から開放されるというのだろうか……

それを探して、今まで生きているのだと自分の中で定義付けて、生きてきた。

きた。

正直…苦しい…

って今はそんな深く考えている場合ではない！急いで目的地に行かな

いと！何か無いかな…ってさっきも見たんだけど…見つけた…

私は周辺地図を見つけたのだ！なんともまあ、よくさっきは見つから

なかったものだと思心できるくらいに大きな地図…

はあ、疲れてるのかな？

近づいていって、ホルステンゲートと言う名前を探す。

周辺地図というものの、地名やビル名、その他の建造物だけを見ても、

数千はある。この中から探し当てるのは、なかなか難しいだろう。

「……探すしかないもんなあ……」

正直もう帰りがかったが、帰り方が判らないので、そのままここで立ち

往生。

「誰か教えてくれないかなあ……」

「私でよければ、お教えしましょう」

老人の声がした。助かった、天の声だ。

「あ、是非お願い……」

と、ここで、ある事実を思い出した。

周りに人は居なかったはず…

私は慌てて振り返った。

そこにいたのは、シルクハットを被ったどこか別の国の男の人だった。

理由は不明だが、肩にはオウムが乗っていた。

「え……あ……」

口を開けたまま、只呆然とその男を見る。

「……ああ、失礼。私は通りすがりの者です。こちら、友人のハイトヨ。」

今はオウム」

（説明もとめてないし！友人ってか鳥だし！）

とか何とか心の中でツツコミをいれつつ、オウムの方に目をやる。

「……初めまして。紹介の通り、ハイトヨと申します。オウムです」
（喋った！？）

「……あの……いろいろと質問いいですか？」

数分の空白の後、私から口を開いた。

「ええ、構いませんよ」

答えたのはオウム。

（いや、あんたじゃないよ！）

「……えと、じ、じゃあ………名前は今聞いたから……あの、日本の方じゃ無いですよね」

単刀直入に、どの国の人ですか？

「おや、以外にも場所に関することかと思ったら……あ、いえ、地図を

見てたものですから」

「……すいません」

「われわれはスイスから参加しています」

「なるほど、スイスから……へ？」

スイスから参加しています！？

「……え、スイスからですか？」

「ええ。正確には、首都から離れた小さな町の、広場からですが」

「いや、あの…そうじゃなくて…あの…スイスにもこのゲームがあるんですか？」

その男の人は、小さく首をかしげて訝しそうな顔をする

「はて。君は何を言っているんだい？」

「いやいや、質問の通りですが。とか考えていると」

「初期のが七年前に日本で完成して、三年前に第四期の新型がわれわれの国にも普及し始めたばかりだよ」

「な！そんなバカな！」

「…本当に知らないのかい？」

衝撃の事実だった。このゲームはすでに全世界に展開し、多くの人に参加しているというのだ。

「ここは、ゲームの中なんですよね……」

「…どうやらあなたは、初めてこの街に来たようですね……」

「…はい、さつき始めたばかりです……でも……」

「さつきは戦っていたのに、今は戦うというよりは普通に生活している街となんら変わらないではないか…ですか？」

その老人は、的確に私の質問を言った。

「え、あ、はい。何で分かったんですか？」

驚いて、声が裏返ってしまった。

「いえ、最初に『戦闘世界』^{バルトリア}に入った人は、この『第二生活世界』^{ライフリウム}に来ると混乱してしまうんですよ」

知らないカタカナ文字が出てきてしまった…厄介だ。

「…どうやら、はじめから話してあげた方がいいみたいだ」
老人が笑顔で言う。

「あ、あの、そうしてもらいたいのには山々なんですが…僕急いで、
そうだ、確かに聞きたいことは沢山あるが、今はとにかく、待ち合
わせ

場所に行かなければならない。

「そうですか…残念だ」

老人が本当に残念そうな顔をした。なんか気の毒になってしまっ
て、
い

くつか質問することにした。

「…さつきスイスから参加しているって言いましたよね…」

「ええ。それが何か」

「…どうして言葉が通じるんですか？あなたが日本語をここまで流
暢に

話しているのは……その、違和感があって」

失礼であることは百も承知だった。

「……それも『第二生活世界』^{ライフリウム} ならではのんですよ
どうやら、全て話してもらえないようだった。

「このシステムは七年前、日本の学者によって開発されました。

始めは単なる戦闘ゲーム、つまり『戦闘世界』^{バルトリア} だけの世界だったん
です

よ。それが、二年経つと『戦闘世界』^{バルトリア} は廃れていってしまいまし
た。

画期的な技術によって、新感覚で楽しめるゲームも、単調なものは
すぐ

に飽きられてしまうということですね…」

彼はそこで一息つく。

七年前、父が豹変した年だ。嫌な思い出が込みあがってきそうにな

り、
考えるのを辞めた。

「そして四年前、戦うだけではなく、生活から仕事まで、現実と同じ事が出来るように考えられ、造られたのが、この『第二生活世界』ライフリウムです。」

名前の通り、セカンドライフが楽しめるということで、高齢者にも人気

が出てきまして…私もそのうちの一人ですね…今では全世界に広がり、

参加人数は六十億人とも言われています」

ろ、六十億人！世界の人間の九割が参加しているということになる。

「おかげで『戦闘世界』バルトリアの方も人員が増えて、今では参加している人間をランキングで表し、そのトップを目指すのが多くの人間の目標と

なっています。だいたい、三十億人ぐらいが参加していますな」

そんなに人気なゲームだったのか…これ…

啞然として、私は二の句が告げられずにいた。

「あなたも、『戦闘世界』バルトリアから参加したなら、ランキングの上位を狙ってみるのもいいかもしれませんよ。上位五十人は特殊機動隊に入ることが出来るんです」

ふと、私へ提案される。

私のあの力は、簡単にランキングのトップに立てると思う。

しかし、あえてそれは言わなかった。

「…それは…特殊機動隊って…なんですか」

「流石に六十億人もいると、通常の規範ではやっていけません。個人意志で動けるわけですからね。そのため、この世界には現実世界で言う法律のようなものが制定されているんですよ。それを執行できる唯一の機関です」

法律のようなもの。そこが引つかかった。

「その、規範というのは、法律とはまた違うんですか？」

「正確には一緒ではありません。どちらかといえば、ですがね。」

『第二生活世界』内では『厳守法』という名で使われていて、
ライフリウム シスビオン

『戦闘世界』の上位五十名の人間で構成されている彼らでしか執行が不可能とまで言われています。理由は簡単。破ったものを武力で制圧するんです」

「……制圧されたものは……」

「この世界からの永久追放です」

私は心に誓った。絶対に破らないようにしよう。

「でも、僕は『厳守法』の内容をよくしりませんよ。その場合はどうすれば……破っても仕方ないとか言うのは通じませんよね」

「ああ、それなら大丈夫です。『第二生活世界』と『戦闘世界』の同時参加には、一度手続きが必要なんです。そこで『厳守法』に関する知識データがもらえます。後は一旦このゲームから抜けて、そのデータをインストールすれば、次に入ったときには全てが把握できるよ
ライフリウム バルトリア シスビオン

うに
なっていますから」

どうやら、このゲームは思っているよりハイテクで、複雑なものようだ。

というか、最初に何を話していたのかをもう覚えていない……

あれ！今話されたこともあまり覚えてない！

…忘れよう……いいや、私には関係ない

「ああ、最初の質問の答えがまだでしたね。『第二生活世界』内は共通言語で統一されていて、参加と同時に相手が話す言葉はそのまま自
ライフリウム

分の国の話す言葉に、自分の話す言葉は相手の国の言葉に自動的に変換されるんですよ」

本当に人間が作ったのだらうかと思うぐらい、凄いい……

「いろいろと、ありがとうございました」

私は深々と頭を下げた。ここまで内情を詳しく知っている人に出会えたのはかなりラッキーだったと思……あれ？

ここで、ある大切なことを思い出す……彼は誰も居なかったはずのこの場所に忽然と現れた。そう、彼も含めて、開始時には誰も見られなかったのだ。

それが、今見ると……普通の世界のように、人が忙^{せわ}しく歩いていった。

いつの間にか、人が出現していた。

「……その驚きよう、どうやらあなたの『突発^{アンチクリアインストール}的情報離散』が終了したみたいです」

「……あ……アンチ……？」

私は驚いた表情のまま老人を見て、小さく呟く。

「『突発^{アンチクリアインストール}的情報離散』。一種の情報混乱です。たまに居るんですよ、参加したのはいいが、誰も見えないというのが……まあ、大丈夫ですよ。もう起こりませんから」

正直不安だった。

「それでは私はこれで」

今度は老人が深々と頭を下げた。忘れられた肩のオウムが落ちそうになって慌てて羽ばたく。

老人は人ごみの中へ消えていってしまった。

「……あ、場所聞くの忘れた」

本来の目的、コトノポリスのホルステンゲートへの道を聞くという事を、すっかり忘れてしまった。しかし、今ではなんとなく場所が分かる気がした。きつとアンチ何とかが終了したおかげだろう。私は、その場を去った。

先程の老人が電話の受話器を取った。肩には相変わらずオウムが乗っている。

「……………」

無言で受話器を耳に当てた。ツーっという音が鳴るだけで、変化はない。

老人がボタンへと手を伸ばす。

《1 0 9 0 9 5 5 6 8》

と慣れた手つきで押した。そして、一旦受話器を置き、もう一度取る。

すると

《おや、あなたから電話があるなんて目面しい》

男性の声がした。

「私だって、報告があるときぐらいは電話ぐらいするさ」

ふっと小さな笑みを浮かべた。

《それで、何かあったのか》

「…お前さんが言っていた人間だが……あれは男か？女か？」

《…そんなことが気になったのか？お前ともあるうものが》

電話の声は皮肉がかったように言う。

「いや、確認までだ」

《…男で、日本人だ》

「……そうか……」

《何かあったのか》

「……六年前のあの事件……まだ覚えているな」
老人の声色が変わる。

《………忘れろ。もう二度と起こるわけがない。ジャンもアスも封印された。それに、二つの扉も反応はない》

「果たしてそうか……もう一度自分の目で確認するといい」

老人が笑う。

「今、『アンチクリアインストール突発的情報離散』が発生していた。それも、相当規模の大きいも

のだ。もう一度審判の針を見てみる」

《……まさか……カウントダウンが始まるのか……こんな時期に》

「少なくとも、この世界はあいつの事を覚えていた事になる」

《残り1078時間48分56秒……》

「……ふ、ざっと見積もって45日ってところか……」

《……しかし、六年経った今、成長したアイツを見つけるのは至難だ》

「それなら問題ない」

老人が一息つく。

「たった今見つけた」

s t a r t

《コトノポリス三番街役場》

ついに着いた。やっとの思いで此処までやってきた。

これまでに尋ねた人の数：四十人

なんともまあ、多くの人に聞いたもんだ。

地図は読めない上に、尋ねた人たちは口をそろえて、そこに役場が見える

から、あそこの建物まで行って御覧なさい。

と言っばかりで、細かい道は教えてもらえなかったのだ。

ちよつと感動している自分が悲しい。

でも、達成感が今まで以上にあるのは事実だ。

周辺のビルはだんだんと減り、逆に木々が増えてきた。
単に街路樹があるだけではなく、それこそ小さな丘までもが広がっていた。

空気が澄んでいる。

一度深く深呼吸してみた。

…… あんまりよくわかんないや

役場に入ってみる。

外見には特に変わったところは見られないが、中は相当変わっていた。

赤い絨毯に敷き詰められた床・高級感漂う皮のソファ―・上を見上げれば
シャンデリアが神々しく光っている。

入ってすぐ、私は踵を返して出て行こうかと決心した。

ここは役場じゃない、どっかの高級ホテルだ！と自分で勝手に定義付けて…

しかし、ここ以外に何とかゲートの場所を知っていると思われる場所が、私の視界には入ってこなかった。
仕方なく、係りの人間に聞いてみることにする。

「あの、すみませ……」

途中で言うのを止めた、と言うより、止めざるを得なかった。
そこに人はおらず、ただ機械が無造作に置かれているだけだった。

カウンター越しに、何も反応しない機会とのにらみ合いが始まった。

「んで、何でわいもついていかなあかんの？まだ、寝足り無いねんで…」

「仕方ないでしょ、マスターが少なくとも四人のルミナリオを連れて行けっ

て行つてたんだから。仲がいいのがあなたたちしかないのよ」
小さな広場に、三つの影があつた。

一人はベンチをめいっぱいに使つて、横になっている。

髪が左右に不規則に撥ねており、けだるそうな表情をしている。

「第一、わいはこんな事考えてなかつたやんか！『5』（ファイブ）
が勝手に言い出した
ことやんか……」

関西弁を話すこの少年が、どうやらベンチで横になっている人物らしい。

「だから、それを見張つてなきゃいけないの。彼が短気なのは重々
承知で
しょ？」

横に立つ女性が話す。

髪がうなじまでしか伸びてない上に、相当な癖がついている。
肌が褐色がかつていて、その容姿はとも日本人には見えなかつた。
歳がわかりにくいのが、少なくとも二十代は過ぎている。

「せやかて、一人でも何てことなくこなして帰つてくるやろ…なあ」
関西弁の少年が同意を求めた先に、別の男性、どちらかと言えば青年が
いた。

「…俺に聞くな」

銀のサラサラと靡く髪を持ち、日の当たらない木陰で本を読みながら座
っている。

「んあー！もう！なんでそんなつめたいんよ！」

「静かにしろ、今良いとこだから…」

小さく睨みつけて、再度本へと視線を落とした。

「…はあ、全く……これならシンク連れてきた方がよっぽど楽しかったわ……」

小さく愚痴る女性を尻目に、二人は黙りこくってしまった。

かれこれ二十分が経過する。

私はあれからずっと機械と見つめ合っていた。

未だに一言も、機械音すらも立てないこれは、本当に稼働しているのだ

ろうか、すこし疑わしい…

足が痛い……

ずっと立ち続けていたせいか、少々疲れたようだ。

すぐ横にあった椅子に座ることにした。

ここもここで変な気遣いからか、真っ黒な一人がけのソファアが置いてあるのだ。

「よいしょっと」

そして、腰を下ろした途端

《イラッシャイマセ ドノヨウナゴヨウケンデショウカ》

「……………え」

しゃべりだした。

「む…お前たち…」

大柄の、低い声の男が、広場にいる三人に声を掛けた。

「お前ら、なぜここにいる」

「さあ、なぜでしょうか？」

女性が^{からかう}揶揄ように言った。

「…五也とハルクスはいつも一緒だからわかるが…なぜレイナがいる…」

お前はいつもシンクと行動を共にしていただろう」

男が寝ている少年と、本の世界に没頭する青年をあごで指し、目の前の

女性、レイナに言った。

「あんたがさつきあんなこと言うから、私たちが監視役任されたのよ。

全く、傍迷惑にも程があるわよ」

レイナのその言葉に男は、はいはいといった感じで両手を広げ、あきれた顔を

「はあ、マスターの考えてることはよくわかんねえな。俺に監視なんて」

「それはどういう意味よ」

「そのまんまさ。一人でも十分過ぎるって事だ。母親のように見守られる

時代はとつくに終わってるんだよ」

「ふーん。じゃあここからあなた一人で行く『5』（ファイブ）?」
挑発的に言う。

「おいおい、今は数字じゃなくて名前のほうで呼んでくれよ。」

それでも公私の区別はしつかりとつけてるほうだ」

「あなたの名前呼びづらいのよ。覚えにくいし」

「それはお前が覚えようとしなだけで」

フンツと小さく笑った男に対し、レイナは頬を膨らませた。

「おい、でくの坊。レイナで遊びすぎるな。俺たちにまで火の粉が飛ぶ」

青年が答えた。

「ああ！？てめえハルクス、今名前を少しいじってなかったか。俺の聞き間違いでは無いと思うがな！」

ハルクスと呼ばれた少年が本から顔を上げる。

「ああ、聞き間違いではない。しつかりとでくの坊と呼んだつもりだが…」

「あは！それいい！デクシルトって名前よりも覚えやすい！」

レイナが両手を合わせて、笑顔で言った。

「こらー！テメー！名前覚えてんじゃねえかよ！」

大きな声で大柄の男、デクシルトが叫ぶ。

「ああああああああああああああああああああ！
うっさいんだよあんたら！」

今まで顔を伏せて熟睡していた少年が声を荒げる。

がばつと起き上がり、ベンチの上に立った。

「あん？起きてたのか五也」

「今起こされたんや！誰かさんのクツソつまらん漫才でな！」

「おやおや、関西ボーイはご立腹かい」

怒る五也に対して、ハルクスが冷静に言った。

「関西ボーイ言うなや！」

賑やかな、それこそ今にも乱闘が起きそうな広場だった。

「おつせーよ！お前今までどこ行つてたんだよ！」

私はコトノポリスにあるホルステインゲートと書かれた看板の前で、到着して早々怒鳴られている。

「……」

無言で荒れているA君を睨む。

「俺たちのいたこいつの部屋から、いつちばん近いところにあるこの場所

選んだのに！何で遠回りして反対側からやって来るんだお前は！」

「……」

私はこの理不尽な怒りをただ受け流して、黙っていた。

第一、すぐ近くならそう言ってくればよかったのに……まあでも、

私はアンチ何とかって言う変なのので、一時的に見えなかったわけ

ですが……

「……」

A君も黙る

「……」

「ごめん、俺が悪かった」

A君の勢いが一気に消えた。

どうやら、にらめっこは私の勝ちの様だ。

「それじゃあ行きますか」

A君に誘導され、私たちは大きなドーム状の建物へと入っていく。

中は明るかった。

幾つかの線が地面を区切っているのがわかる。

白、赤、青、黄、緑、黒と、種々様々な色が互いに交差し合っていた。

「俺たちはここな」

そう言つて、徐に^{おもむろ}取り出した機械を、足元に伸びる真つ赤な線へ近づけた。

すると、その瞬間、本当に瞬間。

目の前の空間に吸い込まれていった。

出会い

辿り着いたそこは、今までいた場所となんら変わりないドームの中だった。と言うより、同じ場所ではないのか？何が違うのが、今一つ分からない。

「よし、誰もいねーな」

A君が周りを見回し、一言そう言った。

少しだけ前に歩いていき、ちょうど私たちが入ってきた、このドームの入り口の辺りで立ち止まってる。

「んでは皆々様」

未だに入り口のそばで佇んでいる私たちに向かって、A君は振り返りざまにそう話し出す。

「その端っこで初めてここに来たみたいな顔して立ってるお前以外は、まだ何も知らないひよっこ同然だ」

B君を指差し、司会者のように振舞った。B君はB君で、ばれたかと言わんばかりに、A君のいる方へと歩みを進める。

「ここが、戦闘用交流スペース『バルトリア戦闘世界』であります」
ドアが開く。

外からの光が眩しい。長い間このドームにいたわけではないのに……
「やはりこの『バルトリア戦闘世界』と言う世界は、名前の通り緊迫している、戦いの世界なのだろうか。」

——胸が高鳴る

そしてA君、B君に続いて、私たちも外に出た。

「なあ、その…ちょっとええか」

五也が前を歩く三人に声をかける。どこか不安そうなその声、だが三人は制止することなく、無視して歩き続けた。

「…なあ」

再度声をかけるも、三人が止まることはなかった。むしろ速度を上げて、五也を置いていこうとする。それに気づくと、五也も速度を上げた。

「おい、ちょ、ま、待てー！ー！」

「何よ、あんたさっきから。こっちは急いでるんだから！」

レイナが振り返って、五也を叱咤する。その勢いに負けじとばかりに、五也も叫んだ。

「アホー、こっちがさっきから呼んだのに、そっちが無視するかやないかい！」

「だから今聞いてあげたじゃないのよ、何って」

「その後の、急いでる、はどーしたー！明らかにわいを置いていこうとしとるやないか！」

二人が言い争いを始める。それも、同じ内容の繰り返しだ。

「…はあ」

終わる見込みがないと考えたのか、今まで黙って見ていたハルクスが、二人のほうへと歩みを寄せる。

「いい加減にしるお前ら。何がしたいんだ、意味が無いぞ」

「てんめえ、ハル、お前もわいを置いていこうとしてたやないか。何が気に入らんのか！」

「落ち着け」

ハルクスが五也の首に痛烈な一撃を加えた。

「ゴフッ」

前のめりになって、五也が崩れた。

「二人の言い争いの原因は何だ？ここまでの道程で何か気に障ることでもあったのか？」

ハルクスが二人を正座させ、目の前に座らせている。

その様子を、遠くからデクシルトが見ていた。

「…そういえば…なんでだっけ……」

レイナが首をかしげ、五也に聞いた。

「わいが質問しようとしたら、あんたら全員無視しよるから、大声で呼んだんや。そしたら、レイナに喧嘩吹っ掛けられたさかい、こちらとんだ被害者やで」

「そ…それが原因か？」

「そうや」

三人がキョトンとする。

その表情を悟ってか、五也が続けた。

「…まさかとは思うが……聞こえへんかった、なんて言わんよな」

…静かな時間が流れた。

「すまん、聞こえなかった」

最初に口を開いたのはハルクスだった。

「…なに？」

「聞こえなかったんだ。こいつに夢中で」

手に持った本を見せた。先ほども読んでいた本とどうやら同じようだ。

「あら、私も聞こえてなかったわよ」

レイナが当然と言う顔をして、ハルクスに言う。

「あんたはなんとなく予想がついてたから、聞き流すことにしとくわ」

五也も流す。

「俺は聞こえていたが…二人が反応しないものだから、無視しているものなのかと…」

デクシルトが頭をかきながら言った。

「……じ、じゃあ、なんで皆して歩く速度が上がったんや？置いていこうとしてたんやないんか？」

五也が立ち上がり、両手を広げて聞く。

「…感知能力の低いお前じゃ、やっぱり気づけないのかぁ。しかたねえな」

ため息ひとつついて、ハルクスが正面の建物を指差した。

「目的地だ」

外に出て、視界が広がる。その世界は、どこと無く懐かしく、なんとなく知っている光景だった。

辺りを見る。

…やっぱり見たことがある景色だった。

私がおかを見間違えることはそんなに無いから、これだけは確かだろう。

遠くに一際目立つ建物が見えた。

あれも見えたことがある…なんだっけ……

…役場？

って、同じ場所！？

「ふふん、水鶏は気づいたみたいだな」

A君が得意げに言った。どうやら同じところらしい。

まったく、アホらしい。さっきの感動を返してほしい。

この景色を知っているのも当たり前前、懐かしく思うのも当たり前だ。ついさっきまで居たところなのだから…

いやそれでも懐かしくは思わないか…

「そう、『^{バルトリア}戦闘世界』と『^{ライフリウム}第二生活世界』はその世界の構造・建物の配置は何もかも一緒だ」

A君の説明が始まる。

…長そうだ…

「ただ違うのは」

一瞬、間が空く。

「ここでは戦うこと、武器の使用が認められ、いつどこで襲われるか分からない…無法地帯だ。以上！さて訓練開始だ！」

短っ！というか、その説明は何だ！怖すぎる！

「ね、ねえ」

横にいた彼女が、A君に声をかけた。

「こ、こっつて、む、無法地帯なんですよ…じゃあ、こんなところにいたら、襲われちゃうんじゃないの…」

怯えた表情をしている。それも尤もだ。

A君の話の通りならば、ここにいてはかえって危ない。いつどこから敵が来るか分からないのだ。

「ああ、それなら心配ないよ『^{シスレオン}厳守法』があるから」

A君が手を正面に伸ばし、左腕の方から180度横に平行移動させ

る。すると、四角や丸、大小様々な枠が現れる。

「これ登録しない限り、相手から襲われることは無いし、自分よりも上の順位の奴からは、下の順位の奴の同意が無い限り、戦闘することもできない。ああ、ゲームセンターにある分離してるやつとか、大会とかは別な」

なるほど、よくできている。

それなら少しは安心できそうだ。尤も、私は別か…

「んじゃ、まず武器出せよ。基本的な事から教えるから」

A君、B君に続いて、彼女も武器を出した。

順に剣、チャクラム、ツバメを出した。

…ん？ツバメ？

彼女の武器を見直す。確かに鳥、ツバメだ。

「お、生物形状アニマルタイプか。久々に見たぜ」

ツバメが彼女の手を離れ、私たちの頭上を旋回し始める。

「ちょ、ちよっとー。降りてきてよー」

情けない声で彼女が叫んだ。

「ははは、最初はそんなもんさ。生物形状アニマルタイプは、あいつらとどれだけ心が通うかで強さが決まるからな。簡単にはなつかない」

B君が自分の武器を回して、彼女に声をかけていた。

チャクラム。別名、戦闘輪とも呼ばれるものだ。

円周が刃物になっており、中央が空洞になっている、癖のありそうな武器だ。

「…あり、お前らは武器出さないのか？」

「……あ、ああ、少し見てる」

C君の答えだ。

私も私で、ここで武器を出す気は無い。と言うか、言われて、ハイっと出せる気がしない。

「そうか、まあ、いいけどな」

「それじゃ、始めるぞ」

A君が促す。すると

「ちよつといいか」

後ろから声をかけられた。

「んあ？なんだあんた？俺達これから訓練モジュール開始するから、勝負ならまた今度な」

A君に話しかけたのは、かなり体の大きな男。しかしその表情はにこやかだった。

「いや、俺は戦いに来たんじゃない」

男が話している途中で、後ろから更に三人。若い男性二人と女性が一人、歩いてきた。

「この中にいる、化け物に会いに来た」

出会い（後書き）

読んでいただいた方は、最後に評価を付けてくださると、なおうれ
しいです

A w a k e

…どうしてこんなことになってしまったのだろう

私の目の前は、悲惨な状況だ。

誰一人として、まともに動ける人物はいない。

倒れている人数は4人…うち3人は黒いコートを纏っていた。

それは…私を含まない。

「…大丈夫…毎回こうだから……」

私の目の前で、男の子声がした。

年齢は私と同じか、少し上。髪は短く、それでいて癖があった。

「…何度やつても……こうなるから……」

彼の着る白いパーカーが、私に何かを訴えかけるように靡く――
まるで…私を知っているかのように。

「多分…これから先も……同じなんだ……」

それは、この惨劇から十分前という、とても短い時間で起きた。

「…化け物ってあんた…何言ってるんだ？」

いきなり現れた男の問いに、A君が疑問符を浮かべる。

男が日本の人でないのは、見れば明らかにわかった。後ろにいる人物のうち、一番身長の高い少年が…多分日本の人であるとは思うのだが…自信は無い。

「見てのとおり、ここには人間しかいねーよ。化け物退治なら、専用のプログラム化なんかで勝手にやってくれ。喧嘩吹っかけられると、こっちが迷惑だ」

勢いよく話す。

そんな事にはお構いなしと言うような顔をして、男がため息を一つ吐いた。

「いいか、俺が言ってるのは見た目が完璧に化物である奴のことを言ってるんじゃない。その中身だよ、な・か・み」

「だから、お前は何を言ってるんだって。ここには俺より強い奴はいないし、いたとしてもそれは特殊機動隊の奴らだろ」

「……お前じゃあなさそうだ。よし、それじゃあ聞くが…この中で黒いコートを纏ったことある奴……いるだろ……」

A君の話を無視して、男の目が私たちを睨む……

ばれた……私の存在が……でもなぜ……こんなにも早く、しかも的確な……

「…へっ、知ってるぜ…この中にいる男のうち、誰かはそのコートを着た事があるに違いねえって事をな」

お、男！よかった助かった。私ではないみたいだ…思わず安堵が漏れる。

「だから何だつてんだよ、黒いコートならそこらじゅうで見かけるだろうよ」

A君も必死の反発をする。

「確かに周りにも黒いコートの奴らはうようよいやがる、だが残念ながら

この中にいるんだ」

男も負けじと声を張り上げた。

「すでに二人に絞れているんだからな…明らかに強い力を感じるんだよ…」

私が、B君、C君を交互に見る

二人とも、血相一つ変えずに、ただその話を聞いていた。

「…はあ。こんな事やりたくねえんだけど…仕方ねえか」
男と私の目が合う。

その殺気立った視線に、心臓が飛び出るかと思った。

「…お前じゃあねえよな」

男が私に話しかける。その問いに、大きく頷いた。
もちろん嘘である。

たとえ嘘であっても、それはばれなければ真実になるのだから…

「…まあ、良いか」

その一言と共に、私の腹部に強烈な激痛が走った。

一瞬、視界が揺らぐ。

「——つあぐ」

声にならない声…

男の大きな拳が、私の腹部、ちょうど鳩尾の辺りに鋭く当たっていた。

15メートル近くある距離を、一瞬で。

「…本当にお前じゃねえんだな。例えゲームでも、痛みは現実と大差ないぞ」

腹部から手を引きながら男は私に聞くが、その問いに答えることは出来

なかった。その前に、嗚咽でかき消されてしまう。

「…っは」

口から、飛沫のように血が飛んだ。

「水鶏！」

A君が叫ぶ。それに続くように、彼女が悲鳴を上げた。

「てえええんめえええ！」

A君が手に持った剣を男に振りかざした。一步半しかないその距離で、

力いっぱい剣を振る。

「…かつかすんなって。この羊の中に隠れてやがる狼が悪い」

男の声は、遠くから聞こえた。私の場所から遠く離れた、元に位置に戻っている。

またしても見えなかった。と言うより、風すら感じなかった気がする。

朦朧とする視界が、かろうじてその男を捕らえた。

「お前え！来い！先に俺と戦いやがれ！」

「待った。その勝負、わいが受けたる」

後ろにいた少年が、二人の間に割り込んだ。

「お前は邪魔すんな！こいつをぶっ飛ばす」

何時に無く、A君が感情的になっっているように思える。私の事を気に掛けてくれるのは嬉しいが……戦ってほしくは無い……負けてしまっ……

「ざぁんねん…そいつは他に用がある。だから、邪魔をしないようにエリア

4404の荒廃地に行こか」

少年が挑発的に言った。

「んにやるー…やってやろうじゃねえかぁ!」

…簡単に挑発に乗ってしまったA君が悲しい……

そして二人は、風のように去っていた。

「…後の二人はどうするの?」

女性の声だ…どこか落ち着いているが、それでいて冷酷さが感じられる。

「特に用は無い…その男はもう武器を出してるからな…服装もちげえ」

「そ。なら…」

女性が一步、足を出した。見えたのは、その一瞬だけだ。

「さようなら」

声は、ただ立ち尽くすB君と、その横の彼女の後ろから聞こえてきた。

パンと乾いた音がした。

直後、B君と彼女は、数字の羅列に包まれ、消えていった。

女性が黒いフードを身に纏い、手に白銀の小銃を持って立っている。

薬莢が音を立てて地面につく。

そこで初めて、私は現状を理解した。打たれたのだ…

「…ふう、全くあつけないわね。避けるとか抑えるとかすれば良いのに」

「無理だレイナ、早すぎる」

奥で一人、本を読んでいる青年が声を発した。女性はいレイナ…という名前か…

「うっさいわね。どーせハルには合わないですよーだ」

レイナが頬を膨らませて、青年を一瞥する。

「さて、本題に入ろう」

男がC君を睨む。

「残ったのはお前だけだ。あっさりとした消去法だったろ」

男が笑顔を見せる。それに対してC君は俯いたままだ。

「女が一人しかいなかったからな、どうやって削ろうか…正直悩んだぜ」

笑いながら、男がC君に近づいていく。

…ってちよつと待て！私は男の子じゃ……そんなに女の子に見えないかな…

「さてと、んじゃあ用件を伝えるな」

俯いたままのC君に、男が声をかけた。

「…半端な奴は消えろ」

声色を変え、その服装までもが変わっていた。そう、黒いコートである。

手には大きな剣。男の身長であっても、その剣は男の体の半分以上の長さ

をしており、その刀身の幅は、赤ちゃんが丸々納まる広さだった。

男が剣を振り上げ、真下に降ろした。

音を立て、空を切る。

「…流石に、いい反応だ。殺りがいがありやがる」

「君の姿は、私の隣だ。」

お腹を押さえて倒れこんでいる私のすぐ横、そこでしゃがんでいた。

「…ごめん水鶏……俺のせいで……」

そして、その姿もまた黒いコートだった。目を疑う。
そして知った。

あの強さは…私だけのものではないのだと……

「…あんたら…何者だ」

A君が目の前の少年に聞く。

「何者って聞かれてもなあ。わいらも実際問題、何者かはようわからん」

真っ黒なコートを身に纏っている五也と対峙するA君が、手に持った剣を
強く握り直す。

ここは『バルトリア戦闘世界』でもかなり人目の無い、と言うより人が来ることなど

皆無に等しい荒地だった。

「見たところ、あんさんはちっとばかり強そうなんでな、こっちに移動し

てもろうつたや。邪魔やかんな」

「うつせえ。ごたごた言っでねえで、さっさと始めんぞ」

「はいはい。おー怖っ」

からかうように、五也が言う。そして、彼の手に長い槍が現れた。

先端は、まるで中国の武将達が使っていた奉天過激や絶鬼魂塊のよう
に、

複雑な刃の付き方をしていた。

「しっかし、野次馬がいないと、こつも静かなんやな」
五也が周りをグルッと見回す。

ちようど後ろを向いたとき、A君が飛び出した。
それに気づき、五也も後ろに少し間合いを取る。同時に、A君が止
まった。

「なんや、そんな猪口^{ちようぐち}な手使ってくるんかいな……」
「……うっさい。俺はさっさとあつちに戻つて、さっきの男をぶつ倒
してやる

んだ。この際手段は選んでられるか！」
五也が仏頂面で耳を塞ぐ。

「うっさいわアホ！そんな叫ばんでも、よう聞こえるわ！」
言い返す。

「……わあたよ。普通にやる」

「……それで、そのことなんやけどな……」

五也の声が小さくなる。

「なんだよ」

「先に言つとくわ、スマン」

「……………は？」

唐突におきたその事態に、A君が混乱する。

「……なんだよ、突然改まつて」

「いやぁ……なんや、向こうで馬鹿でかいのが始まるみたいなんよ」

「馬鹿でかい？戦闘か？」

「ま、そういうこつちゃ」

手に持った槍をぶんぶん回しながら、五也が笑う。

「せやから、始っから全開でいかせてもらうで。面倒やけどな、疲れるから」

「…槍が2本とか3本になるとかか？」

A君が聞くと、五也は感心したような顔をする。

「おお、なんや、わかったんかいな」

「昔同じ事といってる奴いたからな。因みにあいつは3本までは軽く使ってた。本気で6本使われたときもあったな」
過去を振り返りながら、A君が再び五也を睨む。

「ああ、それなら問題ないで」

笑顔から出されたその言葉は、A君の後ろから聞こえた。

「後ろにいられても、俺は大丈夫なんだよ！」

飛んできた3本の槍を、振り向きざまの遠心力の掛かった剣で弾く。
「…大丈夫…ではなさそうやな」

「なに…つく！」

背中に痛みを感じた。

見ると、弾いたはずの槍が1本、腰の辺りに深く刺さっている。
血がにじみ始めた。

「すまん…12本や」

そして彼もまた、数字の羅列に包まれて、消えていった

A・D・DW（前書き）

最終更新日から、100日以上が経過してしまいました。

読んでくださっている方々に迷惑がかかっていたら、今ここでお詫びしたいと思います。

今後がんばりますので、よろしくお願いします。

隣にいるC君が、ゆっくりと立ち上がる。

私のお腹の痛みも、さつきよりは大分楽になっていた。

「俺たちはこの2年間、誰一人として欠けること無く、誰一人増えることなく、同じ人数で行動してきた。

今更新人が入ってこられると、こちらら色々と面倒なんでな、この場で

大人しく消えて、二度とこの世界（stargazer）には入ってこられなくする」

大柄の男が、手に持った大剣を肩に担ぐ。

その動作だけでも、風の切れる音が聞こえた。相当な重さであることが伺える。

「簡単に同意すると思ってるのか？」

C君も、相手の勢いに負けじと、男を睨みつける。

「ま、普通は思わないな。だから、力ずくでも…といっても、力行使した時点で、勝負に勝つっていう前提条件が必要なんだがな…まいったぜ」

敵意むき出しのC君とは正反対に、冷静な口調で話す男。

遠くでは、レイナともう一人の青年が、何か言い争っているようにも見える。

…怒られてる？

「……長居は嫌いだ…そろそろ始めようぜ、新人君」

「望むところだ」

二人が間合いを確認する。

距離は三十メートル。それでも、ここにいる全員にとっては三センチにも

満たない程なのかもしれない。

小さな恐怖心が生まれた。

『やっと来たね…』

声がした

初めて力が覚醒したときのあの声だ。

『ここは駄目だ……やりたいことが出来ない。あいつの所為で…いや待てよ……どっちが得なんだ？』

以前よりもはつきりと、その息使いまでもが聞こえてくる。

と言うより…この声の主は、何を言っているんだ。

やっと来た？

ここじゃやりたい事が出来ない？

あいつの所為？

この意味する言葉は、前に居る彼らに向けられた言葉なのだろうか…

考えてみる

『…考えようとしても無駄さ』

「…っ！」

読まれた！

……心を……

そんな、なぜ……

『何故って…… あんたが今のオイラの器だから……なあ、ジャン』

『…デモ、才前ハ此処デ移ルノダロウ？向コウノ入り易イ器ニ…ソレナラ最早、器デハナイナ』

片言のような声。ちょうど、サスペンス物に出てくる音声変換機で、声色を変えた犯人のような声だ。

『ああ、だが力もちょうどいい。ジャンはこっちで暴れてくれ』

『…無理ダ…… イツモミタイニ、完全ニ使イコナサレル』
いつも……？いつのことだろうか？

『お前が暴れて、どうにかするまでの時間は耐えられるだろ』

暴れる…私の体で？

そんなことさせない…

『それが出来ちゃうのが、オイラ達さ』

「おらあー、さつさと武器出せー！

武器の無い奴と戦うのは俺の性分じゃねー！」

「うつさいデクシルト！こっちは五也がどっかいつちゃって、探索に必死なんだから！」

デクシルトの出した大声に負けないような声で、レイナが返した。かなり遠くにいるはずなのに、その声ははっきりとしていた

「つとーにさつきからお前は！何か俺に恨みでもあんのかよー！」

「……ないわ！」

少し間を空けて叫ぶ。

「無いのかよ！何で偉そうに言ってくるんだよお前…」

「…夫婦漫才は済んだか」

「君が呆れたように言う。片手を腰に当て、仁王立ちしていた。

「…漫才ってほど面白くは無い……アイツの愚行については謝罪しよう」

遠くのほうでレイナが何か言っていたが、無視することにしたらしい。

「…それじゃあ、今度こそは始めるぞ」

デクシルトが剣先を「君」に向ける。

あんなに重そうな剣を軽々と……

「当然」

「君の方は、両手を胸の前に出して、手のひらを下に向ける。

手が淡い光を放ち、光の柱がへと伸びた。

そのまま、手の間隔を広げていく。

手の下から、鍵盤が生まれた。

…鍵盤……ピアノの鍵盤？

「…メロディアス音律戦闘士か……ちっ…苦手なタイプだな」

「始めよう」

「君の声色が変わる。

二人が睨み合う。そして…

『そろそろオイラの出番かな。援護するからとりあえず出て来い』

『…ツエレム達二本氣ニナラナクテモヨカロウ』

『後で何かあったら嫌だからな』

『…ワカツタ』

…わたしの脳裏から、二人の感覚が消える。

刹那

間合いを詰めるデクシルトと君との間に、人影が見える…

まだばんやりとしているが、着ているその服の色はハッキリとわかった。

純白

それが見えた途端、戦う二人の男は、それぞれ後方へ飛んでゆき、壁へとぶつかった。

まるで何か大きなバネで押し戻された様に、文字通り吹き飛ばされていた。

突然起こったその事態に、その場に居る誰もが息を呑む。

『…ごきげんよう、ツエレムの諸君』

あの、私の心の中に響く声が、正確にはその声の主が、私たちの眼前に現れた。

『木を隠すには森の中。人が隠れるなら人ごみ。光を消すには闇の中……』

純白のそれは、ゆっくりと話し出した。

張り詰める空気に似つかない、楽天的な声だ。

純白のフード、私たちが纏うものをそのまま白くしたもののようだった。

飛ばされた二人が、埃を払いながら、何事も無かったかのように立ち上がり、

目の前のそれを睨む。

『それでは……血はどこに隠せば良いでしょうか？』

「……んどくせえー事……言ってんじゃねえー！」

叫んだのは、デクシルトだ。

地面を蹴り、爆ぜるように、その白い人型に突進していく。

……突進していく？

「……あれ……見える……」

私の心の声を、口に出していつてしまう。

そう、先ほど……本当に少し前まで、彼らの動きは見えなかった（……の……）のに、

今は、彼が突進しているのが見える（・・・・・・・・・・）のだ。

一瞬で、私そのものが別人になったかのようなようだった。

「邪魔すんなー！」

大きく振りかぶり、デクシルトが切りかかる。

その場所にいる者の視線が、全て二人に集まる。

『残念。オイラを殺すことはルール違反だ』

未だ、顔の見えないそれが、悲しそうに言った。

声に、違和感を感じた。

拡声器で話しているような、マイクを使っているような。とにかく、何か聞こえが違ったのだ。

デクシルトが接近するにつれて、空間がブレていく。彼らの周りだけ、別の場所にあるかのようなようだった。

『ルール違反は…問答無用に』

それが、ゆっくりと手を伸ばす。

高速で近づくデクシルト。

しかし、私の見る限り、彼の手はゆっくりと進んでいた。デクシルトの速さとは明らかに違う、それなのに……

二つは等速に進んでいるような錯覚に見舞われた。

剣先がそれに触れるか触れないかの瀬戸際。

デクシルトの頭、性格には額の辺りに、白い袖から伸びる五本の指が触れた。
ゲームオーバー
『削除だ』

キンッ

決るような金属音が、一瞬だけ轟く。
見えるのは、白いコートのみ。

それも、その場にいたのは一瞬だった。

転じて、C君のいる場所付近に純白の人型

『そして、君はオイラのもの。
時が来るまで居させてもらうから』

呆然と立ち尽くすC君の頭に、ゆっくりと手を乗せた。

助けなくちゃ…そう思うものの、体が一向に動かない。
まるで金縛りにでもあったかのように、硬直している。

他の二人も、何がなんだか分からないような、しかめっ面をしていた。

『…戴きます』

怯えるC君の顔が歪む。

静寂の中、C君は姿を消した。

「……くそつ、あの関西ヤロー……」

「……しょうがないわよ……あの人たち、なんかすごく強いみたいだし……」

岬たち5人がゲームに参加した、友人の部屋。

既にやられて元の世界に戻ってきた3人が、ゲームオーバーという表示の出たエントラを抱え、座りこんでいた。

「……大体……黒いコードの奴って……」

B君が俯きながら言う。

「……考えても……仕方ないだろ……」

横にいるA君が、B君の肩をポンと叩いた。

また、静寂が生まれる。

未だゲームに参加している二人のエントラが、規則正しいモーター音で駆動している。

「……ゆりちーたち……大丈夫かな……」

不安そうな声を上げる。

その声で、男子二人もまた、同じ気持ちになった。

「でも……あいつらがまだ帰ってこないって事は、どうにか生き延びてるんだよ。まだ負けるって言うことは——」

A君が話している最中

「キヤーツ！」

耳を劈く悲鳴が、すぐ近くで聞こえた。

声の主は、岬の友人だ。

男子二人は、理由を聞くまでも無く、絶句した。

「…消え……」

その部屋にいた人数は5人

しかし今は

4人

その場にいたC君が、エントラごと、この場から消えたのだ。

「……」

誰もが、言葉を失っていた。

「…許さない…」

清閑な空気を破ったのは、A君だ

「…へ」

B君も、素っ頓狂な声をあげる。

「…許さない」

膝元に転がっているエントラを持ち上げ、頭に装着する。

「…お前……」

「……今…使い時なのかはわからないが……少なくとも……こうしな

いと…」

エントラから、ゲームのエントリーカードを抜き取る。
ポケットから別のカードを出し、セットした。

「仕事に…行ってくる……」

泣いている彼女を尻目に、B君はああと頷く。
そのまま、A君は再びゲームに入っていった。

「…なん…で……あんな所に…行っちゃった…の？」

嗚咽を漏らしながら、彼女が聞く。

「…アイツ、あれでもランキング4位なんだよ…」

「…!」

当然というように、しかし何処と無く悲しそうなB君が、ゆっくりと話す。

「4位以上は、何か特別な機関に入らなきゃいけないらしいんだ…
そいつら…かなり強いらしい」

「…じゃあ……」

「ああ、こいつは世界中で、これ（ゲーム）に参加している人間の中で、4番目に強いんだ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7005f/>

LIMIT

2010年10月26日03時49分発行